

津波避難キャスターコメントに関する考察 —報道キャスター対象の定性的調査から—

○福本晋悟¹

¹株式会社毎日放送 総合編成局アナウンスセンター（人と防災未来センター特別研究調査員）

1. 本研究の背景と目的

東日本大震災発生時、各放送局は災害初動特別番組（以下、災害特番と表記）を速やかに開始し、視聴者・聴取者（以下、住民と表記）に津波からの避難を呼びかけた。しかし、避難を十分に“後押し”することができなかった課題を踏まえ、各放送局は放送手法の検討・改善を行っている。その1つで、キャスターが住民に避難などの適切な行動を呼びかけることを目的に、放送局内で検討を重ねられた文言・例文である「津波避難キャスターコメント」も対象となった。放送局内では、それらをまとめた冊子や予定稿を作成して、緊急時にキャスターがすぐに読めるようスタジオに常置している。その理由の1つは、キャスターの経験値やスキルによって、呼びかけられる内容にばらつきが生じることを防ぐためであり、キャスターは、気象庁の観測データなどの最新情報とキャスターコメントを瞬時に織り交ぜ、住民に対して危険回避の行動を促す。

震災後、既に新たなキャスターコメントが、津波警報発表時の災害特番に登場している。2012年の発表時には、一例として、NHKのキャスターは「東日本大震災を思い出して下さい」、「命を守るために」、「まわりの人にも避難を呼びかけながら、どうぞ逃げて下さい」と避難を呼びかけた。また、TBSテレビでは、「沿岸部や海岸にいる人はただちに高台または避難ビルに指定された建物など安全な場所に避難して下さい」などのキャスターコメントを用いた（福長 2013）。

先行研究として、横尾・矢守（2017）は、インパクトのある表現（強い口調・キーフレーズ）や教訓（リアルな事例）などをキャスターコメントに盛り込む検討を提起した。また、福本（2021）による東日本大震災の津波避難経験者（n=10）を対象とした定性的調査では、「今すぐ逃げて下さい」と「東日本大震災クラスの巨大な津波が来ます」を、全員がポジティブに評価をしている。

一方、震災後に登場した新たなキャスターコメントについて、情報発信者であるキャスターを対象とした科学的な調査研究は、ほとんど見当たらない。そこで、本研究では、キャスターが、どのような内容に着目、評価をするのかを調べるため、半構造化インタビューを行った。

2. 調査の概要

（1）本研究のアプローチ

まず、2012年と2016年の津波警報発表時の放送で実際に使用されたキャスターコメントを基本とした独自の「津波避難キャスターコメント」を作成した。

大津波警報が、岩手県・宮城県・福島県に発表されました。東日本大震災クラスの巨大な津波が来ます。非常事態です。今すぐ逃げてください。今避難すべき場所は、高台や津波避難ビル、津波避難タワーなど高いところですよ。急いで逃げることに避難！命を守るために、ためらわずに避難をしてください。この放送を聞いたあなたが、まわりにも声をかけながら率先して避難をしてください。

これを、東日本大震災後にNHKなどが採用している「切迫感のある強い口調」で著者が読み上げて録音した。読み尺は29秒である。これを複製し2度繰り返される「津波避難サンプル音源」を本研究の調査に使用した。

（2）対象と方法

調査対象者は、東日本大震災発生直後の災害特番で、津波避難を呼びかけた東北地方の放送局に勤務するキャスターである。当時の年齢や担当メディアのバランスを考慮して4人に調査を依頼し、調査対象者が勤務する放送局に著者が訪問して実施した（表-1）。

表-1 調査対象者の概要

調査対象者	震災発生当時の年齢	担当したメディア	調査実施日	インタビュー時間
A	50歳代	ラジオ	2019年3月28日	1時間45分
B	30歳代	テレビ	2019年5月31日	1時間31分
C	60歳代	ラジオ	2019年10月10日	1時間47分
D	20歳代	テレビ	2019年11月7日	1時間48分

なお、調査実施期間中に日本国内で大津波警報や津波警報は発表されていないが、2019年6月18日に山形県沖地震（M6.7、最大震度6強：新潟県村上市）が発生し、津波注意報が山形県などの4つの予報区に発表された。

まず、調査の冒頭では、地震発生時にいた場所や放送出演時の思考などを尋ねた。その後、「津波避難サンプル音源」を聴取してもらい、「率直な感想」と「印象に残っ

た言葉、フレーズ」を質問した。続いて、津波避難キャスターコメントの下線 10 パーツの分類を各設問とし、「○○というコメントは心に響きましたか？」と順番に評価を尋ねた。なお、音源の再生は日常の放送受信環境を想定して、全員に同じ CD プレイヤーを使用した。音量は最大 60.9dB、調査対象者との距離は約 90cm である。

3. 結果

設問ごとの回答内容を「ポジティブ」(肯定的)、「ネガティブ」(否定的)、「どちらでもない」に分類して傾向を分析した。特筆すべきは、調査対象者がわずか 4 人でありながら全員の評価が一致したのは、ポジティブな評価の「今すぐに逃げてください」と、ネガティブな評価の「今避難すべき場所は、高台や津波避難ビル、津波避難タワーなど高いところですよ」の 2 つだけだったことである。以下、特徴的な結果を述べる。

(1) 「東日本大震災クラスの巨大な津波が来ます」

A 氏と C 氏はポジティブな受け止め方をした。A 氏は、震災発生から 8 年が経過したことや、当時を知らない人や住んでいなかった世代もいることから、「今ならいいんじゃないですか」と答えた。続いて C 氏の回答である。

これはやっぱり分かりやすいと思いますね。みんな経験しているし、自分が被害に遭わなくとも、その後の情報などで、巨大さ、悲しさを知っていますので、「ああいうことがまた起きるかもしれない」と思うと、これはやっぱり緊迫すると思いますね。

一方で、B 氏は、「東日本大震災」というキーワードを使用する是非についての意見を開陳した。

「東日本大震災クラス」っていうのが、いいのかどうなのかっていうのが。これが東北に流れた場合だと、逆にそれをフラッシュバックしてしまうっていう人たちがいたので、いいのかな、どうなのかなっていうふうには、ちょっと感じてしまいましたね。

B 氏は、放送エリアが東日本だと、あの時の津波を想起する人もいるだろうし、その中には家族を亡くした人たちが思い起こすことへの配慮も必要になるとした。ただ、サンプル音源を聴いて、東日本ではない場所であれば問題ないかもしれないと思ったとし、B 氏自身の中で可否の結論には至っていないということだった。

また、D 氏の理由は少しひねりがきいていて、東日本大震災で津波の被害が大きくなかった地域では、「より大きいもの(津波)が来るかもしれないのに、そこまでの可能性を伝えきれない」ことから、住民が逃げないかもしれないと考えた。つまり、東日本大震災を「想起することによる不利益」を指摘している。B 氏と D 氏の受け止めは、ポジティブかネガティブか不明であり「どちらでもない」評価である。ともに若手キャスターが、

斟酌やジレンマを示した点が特徴的である。

(2) 「今避難すべき場所は、高台や津波避難ビル、津波避難タワーなど高いところですよ」

A 氏は、津波避難ビル・タワーは、放送局が所在する県の住民に馴染みがないと思うため、「高いビル」や「高い建物」の方がよいと答えた。C 氏は、津波避難ビル・タワーがどこにでも整備されているわけではないことから、「より高いところ」や「ビルの屋上」などの言葉の方が分かりやすいと答えた。D 氏は、「東日本大震災を経験した人ならば、鉄筋コンクリートの 5 階建て以上の建物に登ればよいと考える」と捉えた。また、自身が津波避難タワーの存在を確認したことがないため、頭に全く浮かばないと答えた。

また、B 氏は、よく聞くフレーズであることから印象に残っていないと答えた。

このキャスターコメントは、4 人全員がネガティブな評価といえる。特に、津波避難ビル・タワーの有無や認知度などの地域特性が反映されている。これは、石巻市での住民調査の結果と類似した傾向である(福本 2021)。

4. 考察

新たなキャスターコメントのなかには、キャスター自身がポジティブに受け止めて/受け止めることができていない要素が存在していることが分かった。それは住民の様々な心情や状況を想像するが故の「キャスターの戸惑い」であることが垣間見えた。キャスター自身が自信を持って伝えられない言葉があるとすれば看過はできず、今後さらなる議論・検討が必要といえる。

5. 課題と展望

まず、本研究の調査対象者が、ごく限られている点を留意しておかなければならない。また、どのような「受け止め」が起こるのかを幅広く調べるため、あえて調査対象者には「心に響く」の意味の指定を行わず、自由に回答を得る方法を採用した。そのため、回答は個人的意見か放送局の見解か、さらには取材などを通じて耳にした「住民の声」に拠るものかなどの限定はしていない。これらを限定するなどの条件設定下での調査も求められる。今後も横断的・縦断的な研究を展開したい。

参考文献

- 福長秀彦 (2013), 津波警報・NHK が強い口調で避難呼びかけ (参照年月日: 2022.2.26)
<https://www.nhk.or.jp/bunken/summary/research/focus/545.html>
- 福本晋悟 (2021), 津波避難キャスターコメントに関する考察—津波避難経験者対象の定性的調査から—, 日本災害情報学会若手研究発表大会予稿集, 38-39.
- 横尾泰輔・矢守克也 (2017), 東日本大震災の初動報道に関する当事者分析: キャスター自身による分析・調査と実践的考察, 災害情報, 15, 149-159.